次号予告

BOOKMARK 11 2018 SPRING

「目と耳と体の冒険」

［ブックマーク］
2017年 冬号
Take free

BOOKMARK

FREE BOOKLET［ブックマーク］

BOOKMARK

トランプ大統領が誕生し、「これからはどんな時代が訪れるのだろう？」と書いたのが、ちょうど１年前の６号の挨拶文。あのときの不安は、一部、現実になりはじめている。トランプ大統領のかかげる「アメリカ・ファースト」（自国第一主義）は世界へ飛び火し、他者への不寛容はますます目立ちつつあるように思える。

けれど一方で、多様性の尊重もまた、世界の大きなテーマになっていることは間違いない。実際、性別、人種、国籍、性的指向といった多様性を否定すれば、もはや成長も繁栄も幸福もない。アメリカのトップ IT 企業の創業者に移民や２世が多いことはよく知られているし、映画やテレビといった娯楽においても差別的な表現があれば、受け入れられない。日本でも、そうした表現がたびたび「炎上」しているのは、周知の通り。

そんな今だから、だれもが「わたしはわたし、ぼくはぼく」として生きられる社会について考えてみたい。今回はそんな特集です。

（三辺律子）

松田青子

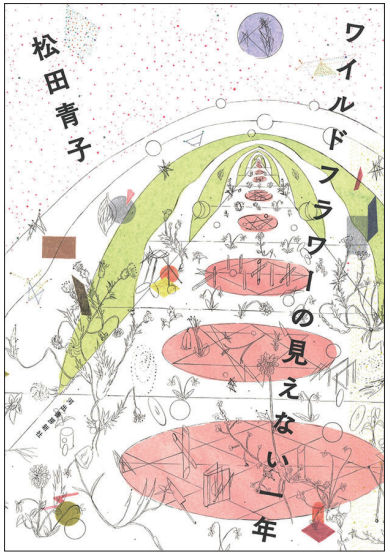
私は幼い頃、父と母に「女の子なんだから」と私の行動を規定や制限されたことが一度もありませんでした。学校生活に馴染むことができなかったので、「女の子らしく」という以前に「人間らしく」できるのか、という状態だったからかもしれません。自然と本ばかり読んでいましたが、絵本や児童文学でも、長靴下のピッピやロッタちゃん、メアリー・ポピンズなど、子どもも大人も、ルールなど知らん、という態度の作品が心に残りました。

この世界は性役割や性差別で回っていると知ったのは、大学に入ってからです。ドン引きでした。それ以来、私は幼い頃感じていたのとは別の居心地の悪さの中を生きています。毎日の中で、悲しいこと、苦しいこと、納得のいかないこと、違和感を覚えることは、ほとんどすべてジェンダーが固定されていることに原因があるように思います。アナイス・ニンの「人は自分が生きることのできる世界を創造するために書くのだ」という言葉が私はとても好きなのですが、自分が出合ってきた、人々が自由に生きている作品たちは、その時々の現実を変えるために、作家たちが書いてきたものでした。

以前、「ヴィクトリアの秘密」という掌編を書きました。自分のセクシャリティに揺れるヴィクトリアという女の子が、本当にカミングアウトをするべきはもっと別の人たちじゃないのかと考える話です。自分は何かを隠していることになるんだろうかともやもやする彼女に、「ヴィクトリアには秘密なんてないよ」と親友が言います。

二年前、東京のある男子校の入試問題でこの作品を使用したと、問題用紙が送られてきました。質問の一つは、「なぜヴィクトリアには秘密なんてないのか、何十字以内で述べよ」というものでした。もう一つの質問も、多様性について問うものになっていました。自分の文章をこういう風に使用してくれた学校があるということが嬉しくて、呼吸のしやすい世界を信じてこれからも書いていきたいと思いました。

『ワイルドフラワーの見えない一年』
短編「ヴィクトリアの秘密」所収
松田青子
（河出書房新社）¥1,500＋税



10_01

["*The Portrait of Mr. W. H.*"ほか]

Oscar Wilde ほか

『ゲイ短編小説集』

O・ワイルド ほか

大橋洋一 監訳

（平凡社）

¥1,400＋税

米国の性科学者アルフレッド・キンゼイによる性行動に関する調査で衝撃的だったのは、夫婦の一週間の性交回数ではなく、両性愛者と両性愛的傾向を持つ者の多さだった。異性愛と同性愛は截然と分かたれてはいない。絨毯の表と裏の関係にもなっている。絨毯は裏返すとそこに、同じ輪郭を共有しながら予想もせぬ光景が、驚異の異世界が広がる。絨毯の両面の関係は文学作品そのものにもあてはまるだろう。文学は、一般的な異性愛文学、そして特殊な同性愛文学と分かたれるのではない。一般のなかに特殊が潜む。異性愛文学が同性愛文学を宿す。そして古典的作品の表面と思われていたものも、実は裏面なのかもしれないのだ。それを感得していただきたく、英文学という枠で短編小説集を考えた。それにしてもタイトルがベタ？　確かに売り上げの大半がネット上通販だった。最近まで (今も？) 書店でレジに持っていけない本だった。だがタイトルをベタにしておかないと、そこでは（すべてではないが）絨毯を裏返して展示してあることがすぐに理解してもらえなかったかもしれないので。

（大橋洋一）

10_02

[*"A Woman's College from Outside"*ほか]

Virginia Woolf ほか

『[新装版] レズビアン短編小説集 女たちの時間』

ヴァージニア・ウルフ ほか

利根川真紀 編訳

（平凡社）

¥1,300＋税

19世紀末から20世紀前半にかけて、アメリカやイギリスなど、時期も場所も異なる女性作家たちによる、女性同士の交流を扱った作品を収録したアンソロジー。それぞれに文体もトーンも変化に富む作品群なので、どの順番で読むか、どの組み合わせで読むかによって、また読後感も変わってくる。例えば、満開の花が描かれる作品として、ショパンの「ライラックの花」やマンスフィールドの「至福」（満開の銀色の梨の木が銀色の満月に触れそうな瞬間を共有する二人の女性を描く）がある。満開の瞬間が特権化されるのは、ウルフの「存在の瞬間――「スレイターのピンは役立たず」」にあるように、「草花や景色がちょうど最適の時刻に、つまり人々がどっと動きだす前に、そこへ行って好きなだけ眺める権利を犠牲にしなかった」女性たちの自律性、お互い同士の絆がなによりも重視されているからだろう。私たちは季節のめぐりとともに、一過性ではないこうした絆を思い出させられることになる。そのほか、組み合わせごとにさまざまな相貌を呈する可能性を、本書ははらんでいると思う。

（利根川真紀）

10_03

[*The Lost Child of Philomena Lee*]
Martin Sixsmith

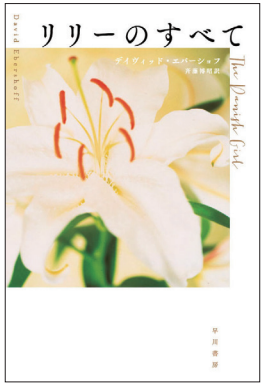
『あなたを抱きしめる日まで』
マーティン・シックススミス
宇丹貴代実 訳
（集英社）
¥1,000＋税

同名の映画化作品（アカデミー賞主要四部門候補作）をご覧になったかたもいらっしゃるだろう。1950年代のアイルランドで婚外子を身ごもった女性が、強制的に修道院へ入れられて出産したのち、愛しいわが子をアメリカへ養子に出されてしまう。映画では、ジュディ・デンチ演じる母親が老年にさしかかって息子捜しを始めるさまが、切なくもコミカルに描かれていた。

本書のほうは、全体の四分の三が、息子アンソニー（養家でマイケルと改名）の描写に割かれている。眉目秀麗、成績優秀、品行方正でありながら、悪い子だったせいで実母に捨てられたのではないかと悩み、自分がゲイであると気づいた思春期以降はいっそう罪悪感にさいなまれる。なのに、同性愛嫌悪の強いレーガン政権下の共和党で、性的指向を隠してどんどん出世していく。うわべと本質とのギャップ、実母への満たされぬ愛慕の念に押しつぶされて、いつしか薬物や性的な背徳行為に手を染め、そして……。時代に翻弄された若者と母親の壮絶な人生を描いた、心に深く残る骨太な実話。

（宇丹貴代実）

10_04



[*The Danish Girl*]
David Ebershoff

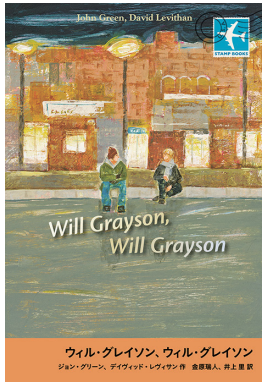
『リリーのすべて』
デイヴィッド・エバーショフ
斉藤博昭 訳
（早川書房）
¥920＋税

この小説の基になったのは、男性から女性の肉体へと変わる外科手術を、世界で初めて受けた画家の実話である。一見、センセーショナルな内容かもしれない。しかし女性の肉体にこだわる主人公のアイナーが、当時（1920〜30年代）の常識やモラルを気にせず、さらに命の危険すら顧みることなく、徹底的に意思をまっとうする姿には、人間のひとつの本能として畏敬の念を感じずにはいられない。

一方でこれは、アイナーのパートナーであるグレタの物語である。映画化作品では描ききらなかった過去の切ないエピソードからは、彼女がなぜアイナーに望む人生を送らせたのか、なぜ献身的に支えたのかが鮮烈に伝わり、胸が締めつけられるだろう。アイナーおよび女性になってからのリリーと、グレタには、人間と人間の強靭な絆が貫かれ、セクシュアリティをテーマにしながら、セクシュアリティから解放された愛の物語に帰結する。そこがこの小説に潜む普遍性だ。コペンハーゲンやパリ、ドレスデンの魅惑的な風景の中で、ふたりの寄り添う魂は時を超えて唯一無二の輝きを放ち続ける……。

（斉藤博昭）

10_05



[*Will Grayson, Will Grayson*]
John Green / David Levithan

『ウィル・グレイソン、ウィル・グレイソン』
ジョン・グリーン / デイヴィッド・レヴィサン
金原瑞人 / 井上 里 訳
（岩波書店）
¥1,900＋税

主人公は２人いる。ジョン・グリーン描くヘテロのウィル・グレイソン（ウィル１）と、デイヴィッド・レヴィサン描くゲイのウィル・グレイソン（ウィル２）。音楽好きなウィル１は波風を立てないことが信条で、好きな子にもなかなかアプローチできない。複雑な家庭で育つウィル２は、リア充への恨みをたぎらせながら、ＳＮＳで知り合った少年に恋をしている。別々の高校に通う２人のウィルは、ある衝撃的な事件がきっかけとなって知り合い、その晩からゆっくりと変化していく。彼らを結びつけるのが、ウィル１の親友でゲイのタイニー・クーパーだ。堂々たる体格のアメフト選手、スーパーポジティブ、自分の半生を描くミュージカルを制作中、身を焦がす恋の相手は分刻みで変わる。彼のすさまじい存在感が、物語を初めから終わりまでぐいぐい引っ張っていく。“主人公の親友” という王道の脇役を担っているタイニーがもう全然脇役じゃないので、誰が主人公なのか本気でわからなくなる――のだが、それはまるで、LGBTQを主人公にしたＹＡが依然少ないことへの、作者２人による解答のようだ。

（井上 里）

10_06

[*Carol*]
Patricia Highsmith

『キャロル』
パトリシア・ハイスミス
柿沼瑛子 訳
（河出書房新社）
¥820＋税

パトリシア・ハイスミスがレズビアンであったことは生前から公然の秘密でしたが、本人はほとんど自分の私生活や恋愛について語ることは、ありませんでした。彼女が青春時代を送った1950年代のマッカーシズム旋風まっただ中のアメリカでは、同性愛者は「悪徳」もしくは「異常」とみなされ、ハイスミス自身も女性がいなければ生きていけないことを自覚しつつ、絶えず社会から罰せられるのではないかという恐怖を抱き続けていました。そうしたひそやかな情熱を、人妻と若い女性のラブストーリーとして昇華させたのが『キャロル』だったのです。発表当時は「真実の生を生きるために必要な刺激（Salt）ではあるが、そのために支払わなければならない代償（Price）」という意味でPrice of Salt というタイトルがつけられていましたが、作中のヒロインは決してレズビアンであることを不幸 sorry だとはいいませんでした。それは当時の多くの孤独な同性愛者たちに生きる力をもたらし、同性を愛するために代償が必要とされない時代への呼び水となるのです。

（柿沼瑛子）

10_07

[*True Believer*]
Virginia Euwer Wolff

『トゥルー・ビリーヴァー』
ヴァージニア・ユウワー・ウルフ
こだまともこ 訳
（小学館）
¥1,500＋税

15歳の少女、ラヴォーンの夢は、いつか貧しさと暴力が石ころのように転がっている街を出て、大学に行くことだった。それは、夫を亡くしてからひとりで娘を育ててきた母の夢でもあった。ひたすら勉強とバイトに励んでいたラヴォーンだが、進学クラスの授業は難しいし、小学校からの親友は怪しげな宗教集団に入って離れていってしまう。そんなある日、同じアパートのエレベーターで幼なじみの少年に出会い、たちまち恋に落ちる。ところが、予告なしに彼の部屋を訪れたとき、衝撃的な光景を目にしてしまう……。

『レモネードを作ろう』（徳間書店刊）に始まる三部作の第２巻。前作とおなじく散文詩のような短いパラグラフで、十代の少女の目が捉えた現代のアメリカ社会と、揺れ動く心の内を繊細に綴っていく。傷ついてぺしゃんこになりながら、「可能性があるという可能性」を信じて真っ直ぐに進んでいく少女の姿がまぶしく、愛おしい。第３巻 “This Full House” も既に出版されているが、邦訳はまだ出ていない。

（こだまともこ）

10_08

[*Postcards from No Man's Land*]
Aidan Chambers

『二つの旅の終わりに』
エイダン・チェンバーズ
原田 勝 訳
（徳間書店）
¥2,400＋税

主人公ジェイコブは17歳のイギリス人。第二次大戦中に亡くなった同名の祖父が生前世話になり、今は尊厳死を選ぼうとしているヘールトラウというオランダ人女性に招かれてアムステルダムへ赴きます。物語は、ジェイコブのオランダでの体験を描いた章と、ヘールトラウが祖父ジェイコブとの戦時中の関係を綴った手記を交互にならべ、時代を行き来しながら展開していきます。

内省的で愛読書は『アンネの日記』というジェイコブは、ヘールトラウの手記を読み、祖父たちが若かった頃を知る一方で、尊厳死や同性愛者の権利をいち早く認めてきた、現代の進歩的なオランダ人たちとの交流によって心をゆさぶられ、さまざまなことを考えます。登場人物の中でとくに魅力的なのが、ヘールトラウの孫にあたるバイセクシャルのダーンと、その友人でゲイの少年トン。既成概念にとらわれない二人の生き方に、ジェイコブは心を解き放たれていきます。とくにトンは読者のあいだでも人気があり、ジェイコブとの出会いのシーンは必読。

（原田 勝）

10 _ 09

[*Trumpet*]
Jackie Kay

『トランペット』

ジャッキー・ケイ
中村和恵 訳
（岩波書店）
¥1,800＋税

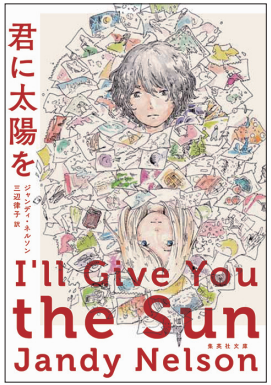
これは愛の物語だ。クラシックといいたいぐらい純真な二人の恋。一時ボタンをかけ違うけれどやっぱり互いを信頼しつづけることを選ぶ家族の絆。

そりゃまあ「おれのお父さんは、あなたの娘だったんです。」っていう帯の台詞に、めまいがする人もいるだろうし、黒い肌のクールな名トランペッターがじつは女！　で、妻はずっとそれを養子の息子にさえ秘密にしてたって話は、びっくり仰天ではあるんだけど。

父の死で秘密を知りブチ切れた息子は、ゴシップ紙の女性記者と暴露本をつくってやると息まく。でも母、バンド仲間、同級生、父の老母、さらに死をきっかけに「彼」を知ることになった戸籍係や葬儀屋など、いろんな人にあてられた各章から立ち上がってくる「真実」は、嘘やごまかしや変人の姿じゃ、ないんだな。それぞれに思い出深い、ただ大切な人の記憶なのだ。

養子だが父と同じ黒い肌のため偏見や誤解に悩む息子は、父の死を通して自身の人生に向き合う。知恵と勇気と愛があれば、個人も社会も大人になれる。身をもってそれを知った作家の稀有な小説。　（中村和恵）

10 _ 10



[*I'll Give You the Sun*]
Jandy Nelson

『君に太陽を』

ジャンディ・ネルソン
三辺律子 訳
（集英社）
¥1,050＋税

主人公は、双子の姉弟ジュードとノア。物語は、二人が交互に語り手をつとめる形で進んでいく。鍵となるのは、ノアは一三歳、ジュードは一六歳の日々を語っていること。そのため、読者は、三年間で家族の状況や二人の関係ががらりと変わってしまっていることに驚かされる。いったい何があったのか？　ページをめくる手は否応なく早くなる。

そして、それ以上に惹きつけられるのは、それぞれ芸術的才能を持つジュードとノアの強烈な個性だ。弟のノアはつねに絵を描いている。道具がなければ、頭の中で描く。姉弟けんかの後、互いに相手の出方を確かめつつ喋るときは「目隠ししてシーソーに乗る姉と弟」の絵を、好きな男の子がだれにでも愛敬を振りまくのを見たときは、「世界じゅうの錠に合う鍵を持っている少年」の絵を。対する姉のジュードは、考えるより先に行動する。指導を受けたい彫刻家の家に押しかけ、断られれば、塀を乗りこえて窓からアトリエを覗く。好きな男が女とイチャイチャしているのを見れば、いきなり飛びこむ！

訳している間じゅう、目眩くような感覚を味わっていた。あの感覚を読者の方も味わってくれれば、嬉しい。　（三辺律子）

10_11

[*My Real Children*]
Jo Walton

『わたしの本当の子どもたち』
ジョー・ウォルトン
茂木 健 訳
（東京創元社）
¥1,300＋税

人生の岐路に遭遇しない人は、多分いないだろうが、本作の主人公でもうすぐ90歳になるパトリシアの場合、それは結婚の諾否だった。若気の至りで求婚に応じてしまった片方の世界では、前近代的な価値観に凝り固まった夫から子どもを産む機械のように扱われ、彼を突っぱねた世界では、素敵な女性のパートナーと出逢い幸福な家庭生活を送りながらも、ことあるごとに社会的な壁に立ち向かわねばならない。つまり、どちらの世界でも主人公が直面するのはジェンダーの問題であり、彼女 (たち) は、矜持をもちながら困難をひとつひとつ克服してゆく。ふたつの世界は、ケネディの暗殺があったりなかったり、片方でのみ限定核戦争が起こったりと、現実の歴史からそれぞれ微妙に改変されているけれど、親の介護や子育てといった日々の労苦は通底しているので、読む人はどこかしら身につまされる部分があると思う。なのに、これほど懸命に生きたふたつの人生の記憶が、認知症の霧のなかで混交してゆくのだから……冒頭で示される設定の悲しさは、読了後にいっそう沁みてくる。

（茂木 健）

10_12

[*The Left Hand of Darkness*]
Ursula K. Le Guin

『闇の左手』
アーシュラ・K・ル・グィン
小尾芙佐 訳
（早川書房）
¥880＋税

遠いはるかな未来、三千の惑星国家を束ねる宇宙連合エクーメンがあった。その連合への加盟を促すため惑星ゲセンを訪れたアイ。ここはかつての地球の植民地、当時の科学者によって遺伝子操作による実験が行われ、新しい人類が誕生していた。すなわち両性具有の人間の誕生だった。ほぼ五十年前に本作品が発表されたとき、この両性具有という概念は読者のあいだにすさまじい反響をもたらした。二十六日周期で訪れるケメルと呼ばれる発情の期間に、ホルモンの変化に応じて各人の性がきまる。ある者には男性の性機能が顕著に生じ、ある者には女性の性機能が発現して妊娠が可能となる。つまり同じ一人の人間が、あるときは男性となり、あるときは女性になりうる世界なのだ。そんな世界の機微が、伝説や民話や預言者の説話などを織りまぜ、アイの手記と、エクーメンの存在を信じたゆえに反逆者として追われた宰相エストラーベンの手記によって見事に描きだされている。そして極寒の大氷原を二人して越えた逃避行の記述は、さまざまな暗喩に満ちた愛の物語といえるだろう。

（小尾芙佐）

10_13

[*George*]
Alex Gino

『ジョージと秘密のメリッサ』
アレックス・ジーノ
島村浩子 訳
（偕成社）
¥1,400＋税

見た目は男の子、心は女の子という小学生が主人公の物語。トランスジェンダーの子が登場する児童書はアメリカでもまだ少ないそうで、LGBT 関連の優れた文学作品に授与されるストーンウォール賞とラムダ賞をダブル受賞しました。E・B・ホワイトの『シャーロットのおくりもの』を読んで感動した主人公ジョージは、学校の劇で女の子の役を演じたいと強く願い、そこから大きな一歩を踏み出します。本書のエンディングに胸を熱くされる方は少なくないはず。

著者ジーノは自身がトランスジェンダーで、「私のように長く思い悩む子がいなくなれば」「周囲の子がトランスジェンダーの子について知るきっかけになれば」という思いから本書を執筆したそうです。日本の編集部へも当事者の方から「私が子供の頃にこの本を読めたら、どんなによかったか」という感想が寄せられています。著者の願いどおりに、幼い頃からトランスジェンダーの人を理解する人たちが増え、誰もが安心して「ありのままの自分で」いられる日が来るといいなと思います。

（島村浩子）

10_14

[*Born on a Blue Day*]
Daniel Tammet

『ぼくには数字が風景に見える』
ダニエル・タメット
古屋美登里 訳
（講談社）
¥730＋税

著者のダニエル・タメットはアスペルガー症候群でサヴァン症候群、さらに共感覚の持ち主です。幼い頃から強いこだわりがあり、そのせいで学校ではいじめられ、人との付き合い方に苦労しました。自分が同性に惹かれることに気づいたのは、彼が中学校のときでした。そして 16歳のとき、初恋の相手に思い切って気持ちを打ち明けます。飾り気のない言葉で書かれているため、人を恋うことの切なさがストレートに伝わってきます。

小川洋子さんから、「思慮深く、優しい声で、ダニエルは私たちにそっと教えてくれる。この世界は、生きるに値する場所である、と」という素敵な推薦の言葉をいただいたことは、忘れられません。この本を読んだ方はおそらく、自分をもっと大切にしたいと思うはずです。そうあってほしいと心から思います。

（古屋美登里）

10_15

[*Le bleu est une couleur chaude*]
Julie Maroh

『ブルーは熱い色』
ジュリー・マロ
関澄かおる 訳
（DU BOOKS）
¥2,200＋税

2013 年度カンヌ国際映画祭・パルムドール受賞『アデル、ブルーは熱い色』の原作バンド・デシネ（フランス＝ベルギー漫画）。有名な出会いの場面はそのまま、でも始まりも結末もまったく違う（もっといえば主人公の名前も違う！）。

これは悲劇か、ハッピーエンドか？　かつてバンド・デシネには学園モノもスポーツモノも存在しなかった。思春期の者たちが読む漫画がなかったのだ。そんな時代に日本のアニメやマンガが輸入され、取り残されていた世代が自己投影の場を見つけ、育ち、今では数々の作品を生み出している。この物語は、自身もレズビアンだと語る作者が美大在学中から描き始め、15歳の主人公クレムが綴る日記からスタートする。フランスの地方都市リールのセピア色の街並みに、愛するエマの、ブルーに浮かび上がる髪――その、ブルーのインクを絵に差す、息を詰めたさまを、目を閉じて想像してみよう。誰にでもあるどこか熱い記憶が、ほのかな痛みを伴い呼び起こされるのではないだろうか。
「もし私が男でもクレムは私に恋をした」エマの言葉が好きだ。

（関澄かおる）

10_16

[*Girl Goddess #9*]
Francesca Lia Block

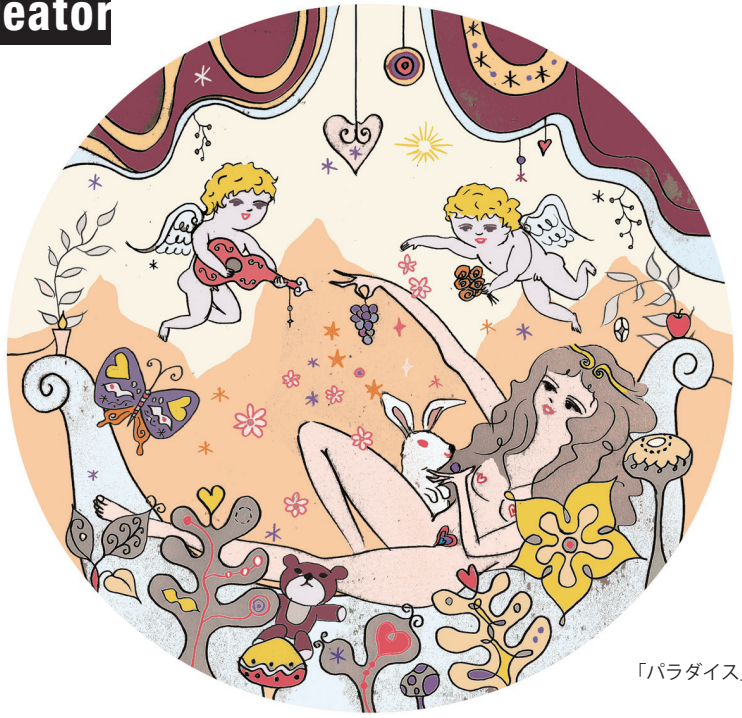
『 "少女神 " 第９号』
フランチェスカ・リア・ブロック
金原瑞人 訳
（理論社）
¥1,600＋税

20年以上前、サンフランシスコに１年いたときに驚いたのは、「自分がゲイかも知れないと思って悩んでいる人は、ここに電話を」という張り紙があちこちにしてあったことだ。その頃、Am I Blue? というヤングアダルトむけのゲイ短編集が出ていたのもよく覚えている。そんななかで出会ったのが、フランチェスカ・リア・ブロックだった。最初の出会いは『ウィーツィー・バット』から始まる５部作。黒人、ヒスパニック、ゲイ、レズビアン、その他、現実が窮屈で生きづらい人々が生き生きとリアルに描かれていて、西海岸のティーンのバイブルでもあった。そんなブロックがそのシリーズで扱った要素すべてを凝縮して短編集の形にしてみせてくれたのが『 "少女神 " 第９号』だ。たとえば「マンハッタンのドラゴン」は、ふたりのママに育てられ、ずっと家でふたりに勉強を教えられてきた女の子が中学校に入ったとき、「父さんがいないのか」とからかわれ、家出してパパを探す物語。その他８編、どれもアメリカ西海岸ならではの開放的な雰囲気と、不気味な現実がせめぎ合っているところが素晴らしい。

（金原瑞人）

Pick Up Creator

レディシロウ（谷口シロウ）
Lady shiroo (Taniguchi Shiro)
https://www.facebook.com/460shiroo
http://460s.com



「パラダイス」

BOOKMARK 10
［ブックマーク］ 2017 WINTER

２０１７年 12 月 発行
印刷：グラフィック

URL：kanehara.jp/bookmark/
Twitter：@bookmarkFB
Facebook：facebook.com/bookmarkfreebooklet/

編集・発行
金原瑞人（法政大学教授・翻訳家）

サンフランシスコの書店で、ゲイをテーマにした Am I Blue? というＹＡ作家たちによる短編集や、フランチェスカ・リア・ブロックの一連の作品が普通に書店に並んでいるのをみて感動したのが 20 年前。最近のＬＧＢＴＱの盛り上がりをみて、何を今更と思いつつ、とてもうれしい。

編集
三辺律子（英米文学翻訳家）

ここ二、三年に訳したＹＡ小説の約半分に、（Ｌ）Ｇ（Ｂ）Ｔの登場人物が出てくる。最初は意識してそうした本を探していたけれど（これに関してはまたいつか）、最近は気づいたらそうだったということが多い。実際の世の中も、そんなふうになるといいなと思う。

イラスト・ブックデザイン
オザワミカ（イラストレーターとかいろいろ）

結婚もし、子も生していますが、思春期くらいから自分自身の性別にはずっと違和感がありました。今はどっちかに自分を分けなくてもいいかなと思っています。性別以前に自分であればよいかなと。

協力
宮坂宏美　田中亜希子　中村久里子